

海の向こうにでて見れば

(2) マレーシアという国

石田 佳子

よく言われることと実感していることの違い

ロングステイ財団の調査によると、マレーシアは「ロングステイしたい国」9年連続の一位です（注1）。また、その他メディアでもマレーシアについて報道する機会が増えています（注2）。その時よく言われるのは、①気候が温暖で過ごしやすい、②治安が良い、③物価が安い（日本の1/3位）、④インフラ、公共交通、医療水準などが先進国並み、⑤英語が通じるといったことですが、実際に住んでみると当てはまる面もあるけれど現実を反映していない面もあると感じます。良い面が誇張されすぎて誤解を与え易いように思うのです。メディアの情報を鵜呑みにして楽園であるかのような夢を描き、移り住んでから幻滅する人がいるという笑えない話も耳にしますから、住むことを検討する場合は耳触りのよい情報だけでなく耳に入れたくない情報も知っておくべきでしょう。そこで今回は、私が実感しているマレーシアという国について、ざっくりとですが描写してみたいと思います。

まず、上記の「よく言われること」との違いについて、①から順に見て行きます。

- ① マレーシアは熱帯雨林性気候の国ですから、雨季と乾季はあるものの、年間を通して夏が続きます。地震や台風の心配はありませんが、屋外を歩けないほど照り付ける太陽や、前が見えないほどの豪雨、轟音を伴う雷などに見舞われることはしょっちゅうです。また、環境問題に対する意識があまり高くありませんから、ごみのポイ捨てや無造作な焼却、大気汚染（ヘイズ）、水質・衛生管理の問題などが気になる人にとっては「過ごしやすい」と言えないでしょう。

私はクアラルンプールの郊外（住宅地）に住んでいますが、普通の時でも毎日床を拭いているにも関わらずモップが埃で真っ黒に汚れます。ヘイズが酷い時には霧がかかって遠方が見えなくなり、家に籠って空気清浄機3台をフル稼働させても気管支系統に痛みなどが出るため、耐え切れなくなり空気のきれいな田舎町へ緊急避難したこともあります。

- ② 治安は近隣諸国の中では良い方ですが、日本のように安全ではありません。2012年の犯罪統計を比較すると、殺人は日本の約2.7倍、強盗は日本の約25倍の発生率です（注3）。

私の実感としては、誘拐や強盗についてはニュースで耳にするくらいですが、窃盗・ひっ

たくり・ぼったくりなどは、知人が多数被害にあっているため、日常茶飯事の印象です。なおその背景には、不法移民や避難民が多数流れ込んでいる状況があるとされています。

- ③ 物価は年々上昇しており「日本の 1/3」は昔の話です。電気・ガス・水道や公共交通機関の料金は今なお格安ですが、住居費や食品価格などは目に見えて値上がりしています。仮に屋台飯だけ食べて暮らせば食費を安く抑えられますが、油・塩・砂糖を多用するため生活習慣病の温床となるでしょう。アルコール、日本食品、乳製品などは日本より高価ですから、平均的な日本人が贅沢せずに暮らすとすれば、今は日本の 1/2 位と思われます。
- ④ インフラなどの設備は「いちおう」整っています。どのような意味かと言うと、建築物などのハード面は充実しているけれど、機能やサービスなどのソフト面がいまいちなのです。例えば、断水や洪水がたびたび起きますし、漏電による事故・火災、エレベーターなどの故障もよく起きます。また、電車やバスが時間通りに来ないのは当たり前ですし、政府機関や銀行などの施設でもコンピューターのシステムダウンで営業を停止することがよくあります。

病院は、都市部に限って日本人医師や日本語通訳のいる所もありますが、数が少ないので、コミュニケーション、医療技術、院内連携などに関して日本と同じレベルは期待できません。私の乏しい経験の範囲でも、氏名や左右の書き間違い、服薬指導の間違い（医師と薬剤師の指示が違った）などのケアレスミスが頻発する上、採血が異常なほど下手だったり、検査室に薄着のまま長時間放置されたり、麻酔を打たれてから英文書類にサインを求められたりと散々でした。しかもなぜか（入院患者の存在は度外視なのか？）心を込めて冷やしてあるため、私にとっては「防寒具を持参しないと風邪をひいてしまう場所」の一つです。

- ⑤ 英語はわりと通じますが、それは都市の中心部や観光地でのことで、地方や、クアラルンプール市内でもローカル色の濃い地域ではマレー語や中国語しか通じないことがよくあります。基本的に、マレー系はマレー語、中華系は中国（北京、広東、福建、客家など）語、インド系はタミール語といった具合にそれぞれの言語を継承して暮らしており、他民族とのコミュニケーションの道具（共通語）として使われる第二言語が英語なのです。そのため、マレーシアの英語は「マングリッシュ」と揶揄されるほど癖や訛りの強いもので、英米国の英語とは別物と捉えて慣れる努力が必要です。そんな風ですから、正しい（英米国の）英語を話さなくても問題はありませんし、流暢でなくてもわかろうとしてくれます。

ただし、公用語はマレー語なので役所関係の書類などはマレー語のみの表記です。また、マレー系の人には、たとえ片言でもマレー語を話すと非常に喜ばれます。

パッチワークのような国

日本とマレーシアの最大の違いは、日本が単一民族国家とみなされるのに対して、マレーシアはマレー系（67%）、中華系（25%）、インド系（7%）からなる多民族国家であることでしょう（注4）。しかもマレーシアではそれぞれの民族がそれぞれの地域で、それぞれの言語、宗教、文化、伝統を継承しながら暮らしているため、同じ多民族国家でも「人種のるつぼ」や「サラダ

ボール」と称されるアメリカとも違って、各民族がほとんど融合していない「パッチワークのような国」なのです。

具体的には、住む場所もマレー系が住む地域、中国系が住む地域などがあり、それぞれの地域へ行くとそれぞれの民族固有の建物や街並み、服装や食べ物、宗教施設や行事などを見ることができます。また、繁華街を歩くと肌の色も顔も服装も異なるさまざまな民族を見かけますが、マレー系はマレー系同士、中華系は中華系同士といった具合に同じ民族同士でカップルになっています。マレー系はイスラム教、中華系は仏教、インド系はヒンドゥー教を多く信仰している上、国民の多くを占めるイスラム教徒は異教徒との結婚を禁止しているため、異民族（異教徒）同士が生活を共にするのはハードルが高いのだらうと思われます。（写真：左はマレー系の多い住宅地で開かれる市場、中央は中華街、右はインド人街の風景。）



宗教が生活の軸

今年は6月18日から7月17日までがラマダーン（断食月）でした。これはイスラム教徒の大切な義務の一つで、信徒は日の出から日没まで飲食物を口にできません。そのため、いつもは賑わう飲食店も昼の間は閑古鳥が鳴いていました。しかし日没後には街の様子が一変し、マレー系住民の多い地域ではローカルフードの屋台が立ち並び、大勢の人が繰り出して楽しそうに飲食物を購入していました。また、ラマダーン明けの第一日目はハリラヤ・プアサといって、家中を掃除してごちそうを用意し、家族や親戚が集まって祝います。この時期は学校も休みとなり、首相官邸でオープンハウスが催されるなど華やかなムードに包まれます。

ラマダーン以外でもイスラム教徒は一日に何度もお祈りをするため、電車の駅やショッピングモール、路地裏など至る所にお祈り専用の部屋があります。モスクからは日に何回もお祈りの音が聴こえますし、言動の端々から信仰が生活の軸になっていることがうかがわれます。しかし、彼らが異教徒に自らの宗教を押し付けたり排除したりする雰囲気は、少なくとも表向きは感じられません。街を歩くと異なる宗教の施設がとても近くに建っていたり、イスラム教徒の祝日、仏教徒の祝日、ヒンドゥー教徒の祝日、キリスト教徒の祝日がすべて国の休日として祝われたりしています。（写真：左はイスラム教のモスク、中央は中華系の寺院、右はインド系の教会。）



ブミプトラ（土地の子）

では、マレー人には敬虔なイスラム教徒が多いから寛大に、多民族や多文化を受け入れているのでしょうか？異なる民族が一つの国で共存することは、それほど簡単ではないようです。イギリス植民地からの独立後、政治は一部の裕福なマレー系が、経済は中華系が牛耳り、富の不均衡が生まれました。そのため、貧しい国民（マレー系）の不満が高まり、1969年5月13日に史上最悪といわれる民族紛争が起きました。中華系とマレー系が衝突して、死者196名、負傷者438名を出す惨事に発展したのです（注5）。

政府は国民（マレー系）の不満を抑えるため、1971年にマレー系を優遇する「ブミプトラ（土地の子）」という国策を施行し、現在もこれが続いています（注6）。この政策は民族による比率を設けてマレー系を優遇するもので、具体的には、マレー系は（入学定員の比率が高いため）国立大学に入りやすい、公務員や政府系の基幹産業に採用されやすい、（民間事業主は一定割合のマレー系を雇用する義務があるため）就職しやすい、（マレー系を入居させる比率や販売時の割引率が決められているため）住宅も得やすい、良い条件で銀行融資を受けられる、金利も低いなどというものです。

マレー系の経済力を高めて国民全体の生活水準を押し上げることが目的とのことですが、このような不公平が非マレー系にとって面白いはずはありません。また、このような「頑張らなくても守られる」環境が与えられることで、もともと勤労意欲に乏しいマレー系がますます働かなくなる、といった弊害も指摘されています。

現ナジブ首相は「ワン・マレーシア（一つのマレーシア）」というスローガンを掲げて民族融和を志していますが、最近の世論調査（注7）や暴動に発展しかねない事件（注8）などを見ると、紛争の火種は常にあり燻り続けているけれどギリギリのところまでバランスを保っている、というのが実情のようです。なお、マレーシアでは政府の意に反する報道をしたメディアは営業停止処分を受けることがあるため、政府への批判や民族間の軋轢などセンシティブな問題についてはその一部しか報道されなかったり、まったく報道されないことも少なくないようです。現代日本人の感覚では抵抗を感じるところですが、さまざまな背景を担った異なる意見をまとめ上げて行くには、強い統制力が必要なのかもしれません。

今回は、「私の目に映ったマレーシア」を書こうと試みるうちに『群盲象を評す（触れた部位によって、長い、平たい…etc）』の喩え話を思い出し、それでは全体像が伝わらないと考え直して調べたことを書き加えたため、だいぶ固い文章になってしまいました。しかし、これを書くことで自分の勉強になった事も多々あり、マレーシアという国がより一層身近なものに感じられるようになりました。次回からは、もう少し身近なテーマについて書いて行くつもりです。

- (注1) この調査は、ロングステイ財団が主催/後援したイベントやセミナーの参加者を対象としたアンケートを集計したもので、「実際に長期滞在している日本人が多い国」ではない。<http://www.longstay.or.jp/newslist/open/entry-1654.html>
ちなみに、外務省の「海外在留邦人数調査統計（平成27年度要約版）」によると、海外に長期滞在している日本人が多い国の1位は米国（約24万人）、2位は中国（約13万人）で、3位以降はタイ（約6万人）、英国、オーストラリア・・・と続き、マレーシアは11位（約2万人）である。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000086465.pdf>
- (注2) 最近放映されたテレビ番組には、2015年6月9日（毎日放送）の『世界の日本人妻は見た！』がある。<https://www.youtube.com/watch?v=BPJEFz2kSA>
雑誌記事には、オンライン東洋経済で連載中の『マレーシア子育て最前線』（野本響子）がある。<http://toyokeizai.net/category/malaysia>
- (注3) このデータは、在マレーシア大使館のHPから引用した。
http://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/guide2014/guide2014-2_2.html
なお、民間の国際的研究機関である経済平和研究所（IEP：Institute for Economics and Peace）が毎年発表する「世界平和度指数ランキング（2015年）」では、日本が8位、マレーシアが29位だった。<http://ecodb.net/ranking/gpi.html>
- (注4) このデータは、日本外務省のHPから引用した。なおHPによると、マレーシアの国土面積は日本の約0.9倍、人口は日本の約1/4（2,995万人）である。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>
- (注5) この紛争は「5月13日（5.13）事件」とも呼ばれる。当時、建国の父であるラーマン初代首相は3民族からなる連立政権を率い、政治・文化系の大臣はマレー系、経済系の大臣は中華系と、権力を分有していた。しかし、同年同月に行なわれた総選挙でそれら与党が議席を減じて野党中華系が勢力を拡大したため、意気軒昂となった中華系がデモを行ない、不満と危機感を抱くマレー系のデモと衝突して、銃撃や放火（約6,000に及ぶ中華系の家屋など）を含む暴動に発展した。そのため非常事態宣言が出され、首相が責任をとるかたちで退任し、1971年2月までの21か月間議会が停止した。
- (注6) ラザク第二代首相は、5月13日事件の誘因を経済格差の問題と捉え、マレー系を優遇する新経済政策を打ち出した。また、これまで中華系が担ってきた経済系の大臣ポストもマレー系に与えて政治経済の指導権を握り、言語・教育・文化の面でマ

レー文化の普及を推し進めるため、憲法や扇動法の改正を行なった。これは市民権・マレー人の特権・国語としてのマレー語・スルタンの地位などについて公的に議論することを禁止するなど、言論の自由に箍をはめるものである。なお、マレー系を優遇する政策はイギリス領から独立した 1957 年からあるが、これほど徹底したものではなく、「ブミプトラ」という用語も公には使っていないため、1971 年に導入されたこの新経済政策を「ブミプトラ」と呼ぶのが一般的と思われる。

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/malaysia/democratization.html

- (注 7) 2014 年 7 月に世論調査機関ムルデカ・センターがさまざまな民族・年齢層の 1012 人に「5 月 13 日と同様の民族衝突が再び起きると思うか？」と質問したところ、マレー系の 53%、中華系の 22%、インド系の 47%が「起きる」と答えた。どの民族においても「起きる」と答えたのは、中高年層よりも若者層に多かった。

http://www.merdeka.org/pages/04_inNews01.html

- (注 8) 今年 7 月 12 日夜、クアラルンプールの繁華街にある電腦ビル Low Yat Plaza で起きた窃盗事件が引き金となり、100 人以上の抗議者がビルに押し掛ける騒動となった。発端は、前日同ビル内のスマートフォン販売店（店主は中華系）で 22 歳の若者（マレー系）が窃盗の容疑で捕まったことである。その後、男の仲間が店に押しかけて商品や設備を破壊し、店員を殴るなどして逮捕された。その光景を撮影した動画を SNS で公開する者、民族問題に起因すると書き込む者など現れたため、翌日マレー系の非政府組織（NGO）代表者を含む 100 人以上がビルの前に集結して暴徒化し、その場に居合わせた車（持ち主は中華系）を破壊したり、取材していたジャーナリスト（中華系）に暴行を加えたりし、7 人の負傷者を出した。騒動はいったん終息したが、政府は民族間対立を煽るデマを飛ばす者を厳重に処罰すると警告し、警察は異例の速さで噂を流した者を含む関係者ら（約 20 人）を逮捕した。